

目次

タイムメラ 11のSF掌篇

装幀・挿画 矢野真

狐畑 ..... 4

タイムメラ ..... 14

ネコトピア ..... 26

隠れ里 ..... 38

ロボット大ジョンの誕生 ..... 48

青の世界 ..... 58

おかえりパドマ ..... 68

闇のちいさ塚 ..... 80

乾闥婆の城 ..... 92

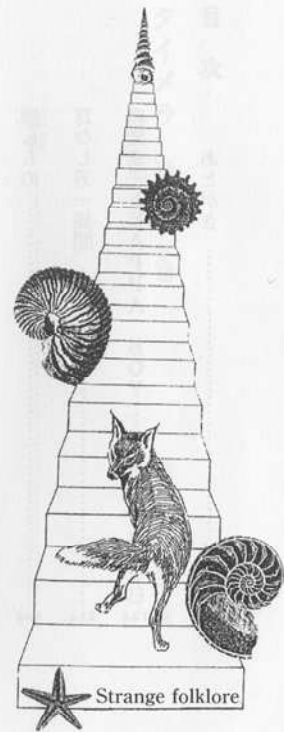
探しもの ..... 104

耳なし芳一異聞 ..... 114

座敷童子とKAPPA BOY ..... 124

あとがき ..... 132

狐畑



バスが、明るい午後の海を右手に垣間見せ、湘南のK市からマリーナのあるZ市にさしかかかって間もなく、せまい切り通しのバス道路わきを足ばやに歩く老女の姿が私の目に入りました。頭は手拭いの姐さんかぶり、背中には大きな竹籠をせおい、紺の

もんべ姿です。(あっ、あのおばあさん...) 車窓からふりかえった私は、日に灼けて皺の多い、その瘦せぎすの顔に、たしかに見覚えがあると思っただけです。が、よく考えると少し変でした。

私の記憶では、そのおばあさんが最後に私の家に現れたのは、たしか娘が小学校に入ったばかりの頃で、当時の彼女は、どう見ても七十は過ぎていたと思っただけです。あれから三十年―私の方も還暦を迎え、孫が二人―とすれば、彼女は百才? それにしては当時と全く変りない、というより、前にも増して元気な歩きぶりです。(もしかして、あれで当時は五十代だったのかしら? もともと老けて見える顔なのが、行商に出るときはわざと年寄りらしく見せて、腰が痛い目が悪いだつて同情を誘っていたのかも...) ぱったりと来なくなったときは実はほっとしたものでした。

なにしろ彼女の最初の訪問は、私が生後数か月の娘を苦心して寝かしつけたときで、(忘れもしない) K市の谷戸にあるわが家のドアチャイムを、たて続けにピンポンピンポンピンポンと、開けるまで鳴らし続けたことに始まります。―この習慣は、いか